

た程度で、児死亡は2例、但し何れも内臓奇形を伴い、周産期死亡は皆無であつた。又Apgar-Score 平均値は9.8となり、児の予後に関しては今後なお follow up を要するが、現在の所極めて良好な成績を示している。

要するに酸素欠乏防止及び C.P.D. の予防並びに娩出期短縮を主因とする産道諸因子の児頭圧迫軽減の影響が窺われ、臨床レベルに於ける所期の目的を達し得たと考えている。

質問 (淀川キリスト教) 笠井 貞夫

前頂位の頻度が多い様に存じますが、産瘤の位置が前頂位の先進部大泉門周囲にあつたのでしょうか。

答弁 (大阪中央) 畑 孝雄

1. 前頂位の頻度は頭位分娩例について初産群で4.9%、経産群で0.7%、全般的には3.4%を示している。

2. 産瘤は当然先進部に発現するが、我々の管理した例では C.P.D. の予防を前提としているのでその頻度は極めて少ないことを強調したい。

156. 妊娠中の骨盤位の取扱い方に関する10年間の統計的観察

(東京・葛飾赤十字産院) 葛西 銀朗, 河井 儀三
佐藤良一郎, 小山 磐

妊娠中の骨盤位の取扱いについては種々と論議多く未だ定見をみぬところである。私共は昭和31年1月1日より昭和40年12月31日までの10年間に当院で分娩した人工早産を除く単胎分娩例総数25,701例について調査、そのうち妊娠23週以降1度以上骨盤位と診断された11,100例に行われた自然放任、膝胸位及び外回転の各処置と骨盤位分娩頻度との関係を分析検討した。それによると昭和31年より35年迄は主として外回転が行われその処置率は5年間の総数5,232例中自然放任3,195例の61.1%、膝胸位例116例2.2%、外回転は1,921例の36.7%、この骨盤位分娩頻度は5年間平均3.4%、一方昭和36年より40年迄の後半の5年間は主として膝胸位が行われ、その処置率は総数5,867例中自然放任3,318例の56.6%、外回転例は199例の3.4%、膝胸位例が2,350例の40.1%と多数に上っている。そしてこの間の骨盤位分娩頻度は平均4.8%と増加している。以上の成績より外回転を行うことにより骨盤位分娩頻度は低下すると考えられ、推計学的にも有意の差が認められた。又各処置の最終回転率成績では自然放任93.1%、膝胸位82.8%、外回転90.3%であつた。妊娠経過と回転率との関係では、最も好成績をみせた妊娠時期は自然放任30週、膝胸位32週、外回転30週であつた。又、子宮底長と回転率の関係で好

成績だつたのは自然放任26~27cm、膝胸位27~28cm、外回転27~28cmであつた。膝胸位例の膝胸位指示後頭位回転迄の期間は大半の53.2%が2週以内に回転している。以上より外回転により骨盤位分娩頻度は低下する。又妊娠31週、子宮底長27cmまでは自然放任による自己回転を期待し、以後は2週間の膝胸位観察、その後は外回転を試みるべきであると考え次第であります。

質問 (聖バルナバ) 山村 博三

① 膝胸位による不成功例に外回転術を行い、それでも不成功であつた者は何%位あつたか。

② 又、そのような例の分娩経過はどうであつたか。殊に児の予後はどうであつたか。

答弁 (葛飾赤十字産院) 葛西 銀朗

外回転が最初に行われて頭位に回転出来た率は63.5%、その不成功例に対して自然放任及び膝胸位を行わせしめて、その率を追加した。回転成績は合計90.3%であつた。すなわち外回転術が一時不成功に終つても、その後に前記の自然放任及び膝胸位が指示されると尚相当に頭位に回転する例もあり、外回転術の不成功即無効とは言ひ得ない。又外回転群の予後に就いては、先づその直接障害頻度として取り上げる例は極めて少く、10年間を通じて児心音不整、早産を来した例数例に止まる。骨盤位分娩児死亡率(周産期)は4.4%同分娩時死亡率は1.5%であることから、外回転群の児予後が他群に比して顕著な差があるとは考えないが、詳細については誌上発表を御参考にして頂きたい。

157. 骨盤位分娩 101例の検討

(東京・聖母病院)

尾島 信夫, 木部 純一, 福島 穰
早川 信義, 吉田 啓治

昭和39年11月1日から40年10月31日までの一年間の総分娩数2526例中、115例の骨盤位分娩があり双胎および胎児胎内死亡後の骨盤位分娩を除いた101例(4.0%)について検討し報告した。この間、周産期(この場合陣痛開始から出生後1週間)の児死亡は0で、初体重2500gから3500gまでのものが全体の70%(70例)でApgar score の平均値も8.8と極めて順調な分娩を行つている。初体重3500g以上の20例では7例(35%)が帝切で、骨盤位全体では14例(13.9%)が帝切であつた。これは小畑(6.6%)、西村(7.4%)、安井(12.0%)、唐沢(12.3%)等よりやや高率であつた。帝切の適応としてはSNOW氏変法(福島)によるレ線骨盤計測に従つたC.P.D. 7例が最も多く、その他前期破水、臍帯脱出、